

## 論文の要約

題名：ヘンリー・ジェームズの小説観と道德意識

後川知美

ヘンリー・ジェームズが理想とする小説は、彼が「小説の技法」において、「深遠な作品は決して浅薄な精神から生まれず、作者の道德意識が優れていれば、小説も優れた芸術性を備える」と主張したように、道德意識と芸術性が切り離せないものであった。そこで本論では、ジェームズ作品における主題やその小説手法を分析しながら、作家ジェームズの道德意識を探り、彼が目指した小説芸術がどのようなものであったのかを明らかにした。

本論で取り上げたジェームズ作品は、1870年代から1900年初頭にかけて、アメリカ資本主義がきわめて急速に発展し、社会構造が劇的に変化した時期に書かれたものである。このような社会状況を念頭に、第1章ではジェームズの小説論の代表的作品である『ホーソン論』を取り上げ、ホーソンの「地方性」や、ピューリタニズムの描き方に対するジェームズの着目の仕方を探った。ジェームズは、ホーソンの「地方性」を賛美する一方で、セイレムに深く根ざすが故に地方限定的になっている点を惜しみ、それが、ホーソン作品批判という形をとっている。そしてその批判の中には、ジェームズ自身の文学的野望が強く表れている。つまり、『ホーソン論』における賛否両論は、物質優先主義に傾く当時のアメリカにおける小説芸術の地位の低さを打破したいとする、彼の作家的野望を反映したものであったのである。ジェームズは、ホーソン作品の限界を指摘しながら、『ホーソン論』を通してこれからのアメリカ小説の発展とその理想的なあり方を模索していたのである。

第2章第1節では、前期作品の『ロデリック・ハドソン』と「マダム・ド・モーヴ」を取り上げ、「観察者」の役割を持つ人物を通して、ジェームズの描く道德意識に迫った。『ロデリック・ハドソン』におけるローランド・マレットは、主人公ロデリック・ハドソンを観察する立場の副人物であるにもかかわらず、主人公と同等か、それ以上の存在感が与えられている。しかしローランドの観察者としての役割には不十分な部分があり、この時期のジェームズが、観察者の役割を通じて道德意識を伝える手法を試行錯誤していたことが窺える。しかし『ロデリック・ハドソン』とほぼ同時期に書かれた「マダム・ド・モーヴ」における語り手ロングモアも、観察者の役割を持ち、彼の心理はより克明に描かれている。すなわち、ジェームズはこの二つの作品によって、観察者の心理描写そのものが物語を進行させるという手法を、荒削りながら確立していったと推察される。

第2章第2節では、禁欲主義を人生の指針とする男として読まれてきた、『使者たち』の主人公ストレーザが、生へ執着する態度を通して、より奔放に生きてみたいとする、自由への欲求を示す点に着目する。ストレーザは、根本的には禁欲主義的な道德意識を持つ人物であるが、新しい世界の快樂的要素にも強く惹かれて、禁欲主義と自由への欲求との間で葛藤

する。ジェイムズは、ストレーザの持つ人間的な感情や欲求をある程度肯定しながらも、その欲望の行き過ぎに対して警告を発する。また、欲望に流されるだけではなく、そこに冷静な判断をも取り入れることで、より充実した生のあり方を探ろうとしているように見える。そこには、アメリカの富の意味や、アメリカの美德とされてきたピューリタンの道徳主義を見直そうとしたジェイムズの意図が窺える。

第3章第1節では、『アメリカ人』の主人公ニューマンの矛盾する性格と彼の富を通して、アメリカ人であることの意味をジェイムズがどのようにとらえているのかを考察した。ニューマンは典型的なセルフメイドマンのアメリカ人として描かれ、成功を追い求めるアメリカン・アイデンティティを再確認させつつも、金銭的な成功が全てではないとする生き方を提示している。ジェイムズは、ニューマンの矛盾を肯定的に描きながら、彼が金銭への執着から解放される最終場面において、自己犠牲の精神の優位性を伝えている。それは、ジェイムズが後々追求してゆく一つの理想形としてのアメリカ人の姿に他ならない。

第3章第2節では、『アspanの手紙』を通して、ジェイムズが、アメリカ人の立場から、作品の舞台となる19世紀後半のヴェニスをどう見ていたのかを分析し、ジャーナリストである語り手の理想の在処と、その崩壊の意味について考察した。ジェイムズが、アメリカのジャーナリズムの負の側面だけを見ていたわけではないことは、語り手の最終決断の中にも明らかである。

第3章第3節では、『鳩の翼』の主人公ミリーと富との描かれ方を、彼女を取り巻く人々との関係や、その中で生じる心理的葛藤に着目して分析した。晩年のジェイムズは、アメリカとヨーロッパの対立に焦点を置いていた前期作品とは異なり、ミリーを通して、両者に深い理解を示しつつ、新しい人間観や世界観を表現している。その結果、ミリーのアメリカ的な富は善悪の二項対立を越えて機能し、彼女の精神的魅力をより一層強めている。ここには、晩年のジェイムズが到達した、国際的題材や道徳意識に関する新たな境地を確かに見ることができる。

結論では、ジェイムズの描く道徳意識を振り返り、ジェイムズの主人公達が伝統的アメリカの道徳意識である、ピューリタニズム的禁欲主義から外れてゆく、人間的欲求や衝動を、二重意識や矛盾する行動を通して描いていることを再確認した。ジェイムズは、ホーソーンの時代から受け継がれたアメリカ的道徳を最低限保ち続けながらも、ホーソーンの時代よりも国際的な活躍ができる、新しい時代の人物の複雑な心理を、リアリズムという新しい手法を取り入れて示すことで、ホーソーンを超える、アメリカ独自の新しい小説スタイルを確立してゆこうとしたのである。

以上

